

先週の礼拝メッセージ(2024年4月14日) ベン牧師

「主のみことばへの信頼」 詩編 119:9-16

詩編 119 編は、以前にも取り上げましたが、この詩篇は主のみことばを賛美している詩編です。

「私はあなたの掟を楽しみとし、あなたの言葉を忘れません。」(16 節)

「戒め」「掟」とは、旧約聖書の律法(モーセ五書)を指しています。作者は律法を楽しんでいると言っています。一般的に、規則や掟を楽しみにするという人はあまりいないでしょう。ところが、神様の戒め、命令を心から喜び楽しんでいるという表現が、119 編のみならず、旧新訳を通して聖書には多く記されています。

「どうすれば若者は自分の道を清く保てるでしょうか。あなたの言葉どおりにそれを守ることによってです。」(9 節)

若い時というのは、誘惑の多い時期です。肉体的、精神的、生活の面において、将来がある分それらの欲望を強く持ちます。そんな若い人が、どうしたら自分を聖く保てるかという問いに、みことばを守ることによってだと答えています。ではどうしたら守れるのでしょうか。クリスチャン=強い人、良い人と考えるのは少し違います。クリスチャンも悩みますし失敗もします。誘惑に負けてしまうこともあるでしょう。では世の中の人とどこが違うのでしょうか。それは、悩みや失敗、弱さの中に神様が共にいてくださるということを知っているということです。私の罪や弱さは、イエス様の十字架によって解決が与えられているということを知っているのです。

「私は心を尽くしてあなたを尋ね求めます。あなたの戒めから私が迷い出ることをないようにしてください。」(10 節)

神様に近づきたい、喜ばれたいという心からの願いを持つということが、神を尋ね求めるということです。

我が家の長男がまだ5歳くらいの時、私が出かけるにあたって、お菓子は勝手に食べない、おもちゃは片付けておくということを言いつけました。しばらくして帰ってくると、息子は嬉しそうに飛び出してきた「お父さん、全部できたよ!」というのです。満面の笑みでした。人間の親子でも、その信頼関係が良好であるなら、子が親の言いつけを守ることは、子どもにとっ

て喜びであり、誇りとなるのです。これが信頼関係が崩れていたらどうでしょうか。守ろうとはしないし、その命令は重荷でしかありません。私たちと神様との関係もそのようではないでしょうか。神様が願う歩み、神様が私たちに語られること、それらに聞き従うことは、クリスチャンにとって本来喜びとなるはずで

「神の戒めを守ること、これが神を愛することだからです。」(ヨハネの手紙 I 5:3)

戒めを守ることが愛することとは、なかなか結びつきません。しかしこの詩編の作者は、神様を心から愛しているから、神様の戒めを守ることが喜びであり楽しみだったのです。神様を愛しているなら、神様の戒めは重荷にはなりません。

「神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。」(ヨハネの手紙 I 5:3 新改訳)

聖書の言葉を上っ面だけを取り上げて、守らなければならないと頑張っても、それは重荷でしかなく、長続きはしません。イエス様の時代にも、パリサイ人たちは、神を愛することよりも律法を守ることに躍起になって、自分自身を、また人々を律法でがんじがらめにしていました。イエス様はそんな彼らを痛烈に批判しています。聖書が一番私たちに伝えたいのは、神様がどれほどに私たちを愛しているかということです。私たちの救いのために、イエス様が私たちの罪を全て負って十字架にかかってくださったこと、イエス様を信じる者は新しくされるという、このメッセージを聖書は伝えているのです。神様の愛を受け取って、聖書を読む時、戒めは喜びとなるのです。だからこそ、16 節に戻りますが、神様に触れるなら神様の愛をもっと知ることができ、私たちは神のみことばを楽しみ喜べるのです。たとえ失敗しても、決して私たちを見離さない神様に信頼し続けていく時、私の頑張りではなく、ふと気づくと、今まで腹が立っていたこともなんともなくなり、落ち込んでいたことも感謝へと変わる自分を発見するのです。これこそ私たちに与えられている祝福ではないでしょうか。聖霊の働きです。私たちは心からの感謝をもって、神様から与えられたみことばに信頼し、神様の祝福を受け取ろうではありませんか。